期待の若手シリーズ

私にも言わせて！ 第139回

初めて知った公衆衛生の世界は想像をはるかに超えた魅力あふれる異次元ワールド

兵庫県保健医療部長
山下 輝夫

1989年神戸大学医学部医学科卒業、同大学第二外科（現 心臓血管外科）入局。1996年同大学大学院博士課程修了。神戸大学医学部附属病院、兵庫県立姫路循環器病センター（現 はりま姫路総合医療センター）、聖隷三方原病院等にて心臓血管外科診療に従事。2013年兵庫県入職（但馬県民局朝来健康福祉事務所長）。2016年健康福祉部疾病対策課長、2020年健康福祉部感染症等対策室長を経て、2022年より現職。

停止した心臓が再び動き出すことに感銘を受けて、心臓血管外科医に憧れ、診療に没頭した24年間を経て、兵庫県に公衆衛生医師として入職しました。50歳を迎える節目の年に人生の再スタートを切り、これまでの臨床経験を生かした新たな公衆衛生医師像を模索しながら、持続可能な保健医療行政の確立に努めています。

転機のきっかけは、48歳の時に実家近くの病院に異動となり、大学卒業以来あまり話すこともなかった1人暮らしの年老いた母親と話す機会が増えたことでした。彼女と話す中で、それまで疑う余地もなかった自分自身の生き方や価値観が揺らぎ始めました。残り限られた人生の中で、一人の平凡な心臓血管外科医として、今後何ができるのか思い悩んでいる時に、以前から公衆衛生の世界へ誘ってくれていた先輩医師から再度お話をいただきました。臨床から離れて公衆衛生医師になることは、何か敗北感に似たような思いもあり、これまでは断ってきましたが、今回は言葉が心に突き刺さり、運命に導かれるがごとく、意を決して公衆衛生の世界に飛び込むことにしました。

新人保健所長として

第2の医師人生は、兵庫県但馬県民局朝来健康福祉事務所で保健所長として始まりました。兵庫県北部の多自然地域に位置する事務所であり、職員や地域住民をはじめ地元医師会や医療機関・介護事業関係者、市役所や警察関係者など、あらゆる地域のステークホルダーは本当に温和で寛大な人が多く、行政経験のない私に対しても快く歓迎してくれました（と思っています）。ここでの時間は、新幹線から普通列車に乗り換えたごとくゆっくりと流れ、心身共に余裕を持って行動できることの素晴らしさを実感できました。また、初めて出会った保健師という職種の職員をはじめ、各担当者がしっかりと法律に根拠を求めて仕事をしていることに感心し、ひとたび緊急事案が発生すると、職種・職責に関係なく職員みんなで協力しながら迅速に対応するなど、組織の働き方と個人の働き方がうまく調和していることに驚嘆しました。これまでの臨床現場では、医療関連法規すら意識したことはなく、行政用語やルールなどはすべてが初耳であり、異次元ワールドに迷い込んだ戸惑いを感じながらも、なぜか安心感を覚えたのを記憶しています。また、国立保健医療科学院での3か月間の研修にも参加させていただき、公衆衛生の奥深さと、日本各地域の実情を学ぶことができ、臨床医師から公衆衛生医師へと心も身体もスイッチを切り替えることができたと思っています。

本庁勤務、そしてコロナ禍

3年間の保健所勤務の後、本庁の疾病対策課長を拝命し、全県的ながん・難病・感染症対策等に関するさまざまな計画・施策の立案、関係部署との調整等に携わることになりました。兵庫県は、旧五国（摂津・播磨・但馬・丹波・淡路）から成る多様性に富んだ文化と日本海、瀬戸内海そして太平洋に面する広大な面積を有する県であり、神戸市などの都市部と多自然地域間での地域格差が非常に大きく、調整に苦労しながらも充実した日々を送っていましたが、そこに襲ってきたのが新型コロナウイルス感染症でした。

令和2年3月1日に県内第1例目の陽性者を確認して以来、想像を絶する闘いの日々が始まりました。対応強化のため全庁的に組織改編され、私も感染症等対策室長として保健医療分野の統括役を担うこととなりました。感染急拡大の波が来るごとに、住民や医療機関等からの恫喝（どうかつ）にも近い要請・苦情を絶えず受けながら入院調整に難渋し、日本において患者が入院できない事態になるとは思いもしませんでした。医療へのフリーアクセスが保証されている国で、医療資源散在と有事危機管理における指揮命令系統の不備などの日本特有の課題が医療逼迫（ひっぱく）に拍車をかけ、不安をあおるかのようなマスコミの過熱報道により住民はパニックとなり、まさに100年に一度の感染症パンデミックによる災害級の医療危機を経験しました。このような状況の中、最後に何とか患者を引き受けてくれたのは、臨床時代の仲間であり、人とのつながりの重要性を改めて実感し、この経験は一生の宝物であると思っています。

保健医療行政のリーダーとなる若手公衆衛生医師へのエール

人間、年を重ねるにつれて、誰もがプレーヤーからマネジャーへと役割が変わり、臨床現場でもいつしか肩書きがのしかかり、病院や診療所のマネジャーへと変わっていきます。公衆衛生医師は、いわば地域における保健医療行政のマネジャーであり、責任は大きいがやりがいの宝庫ではないでしょうか？　私は現在、保健医療部長として地域医療確保や医師の働き方改革の推進、子どもを産み育てやすい兵庫の実現など、約550万人の兵庫県民の命と健康を守るために奔走する日々を送っています。これからの公衆衛生の世界は、コロナ禍を経て加速された医療DXのさらなる進化により、勘や経験だけではなくさまざまなデータを駆使し、課題抽出から施策立案、介入評価などを客観的視点も重視しながら仕事を進めていく、EBPM（Evidence Based Policy Making）が重要で、若手公衆衛生医師の活躍がますます期待されています。

最初から公衆衛生医師を志す者がいれば、私のように臨床を経てセカンドキャリアとしてスタートする者もいると思いますが、長い人生においていつでも方向転換できるし、引き返すことも可能です。もし悩むことがあるならば、いったん立ち止まり、回り道をして違う景色を見ることも決して悪くはありません。私は心臓血管外科医のキャリアを無駄と思ったことはなく、どんな立場でも医師としてやりがいを持って働きたいと願っています。

兵庫県に興味をお持ちの方は、ぜひ、「兵庫県公衆衛生医師採用サイト（https://career.m3.com/kuchikominavi/official/hyogo/top/）」をご覧ください。

最後に、若手公衆衛生医師へのエールとして、次の言葉を送りたいと思います。

「人生はたった一度。人とのつながりを大切にしながら、仕事も私生活も一つのことにこだわらず大いに楽しみましょう」